

論文

幼児から児童につながる造形活動(遊び)に関する考察Ⅱ
—「絵遊び」とモダンテクニックによる子どもの育ちと
保育系学生の表現能力と支援能力の育成について—

若 杉 雅 夫

はじめに

本稿は、私が2013年に東海学院大学短期大学部紀要 第39号に発表した「幼児から児童につながる造形活動(遊び)に関する考察—絵遊びと表現能力の育成に関して—」の続編的位置づけにある。その趣旨は、絵を描くことに自信のない子ども、嫌いな子どもに対する造形活動の支援の在り方と、子どもが主体的に表現活動に取り組むことができるように導く支援についてであった。今回も、同様の趣旨に基づいて、幼児から小学校低学年の児童を対象とした造形表現活動とその支援と指導の在り方についての考察が核となっている。本稿で刷新した内容は、前稿の副題に示した「絵遊び」と表現能力の育成に関しては、表現技法をより正確に広範に取り上げるためにモダンテクニックを加えた。また、前稿では、「ぬたくり」や「スクリブル」から発展した「ぐるぐる遊び」、「ドリッピング遊び」の展開、ステンシルから私が子どもの絵遊びとして発展させた「色玉遊び」についてのねらいと活動内容、遊びの展開や子どもの心の育ちについて論じた。この点に関しても本稿では、遊びの種類を変更し、その表現遊びを活用した新たな表現の在り方を検証した。さらに、「絵遊び」・モダンテクニックの概念を広範に捉え、具体的なテーマを設けた絵画製作の中に、「絵遊び」・モダンテクニックの要素を組み入れた表現活動に関しても考察の対象とした。また、保育者・教育者となる学生の造形活動に関する表現能力の広がり、柔軟な指導・支援能力の育成に関しても、その活動実態と表現遊びの振り返りの記述を基に論じた。

1. 「絵遊び」「モダンテクニック」とは

副題にある「絵遊び」・モダンテクニックの表現は、スクリブ(クレヨンなどで行うぐるぐる遊び)、ぬたくり(水彩絵の具で行うぐるぐる遊び)、転がし遊び(ビー玉転がし・ローラー転がし)、マーブリング、デカルコマニー、スタンピング、フロッターージュ、スパッ

タリング、スクラッチ、ドリッピング、コラージュ、にじみ絵、色水遊び等が挙げられる。厳密に区別すると、例に挙げた中で転写を伴う遊びは、オートマテック版画とも呼ばれるが、今回は平面表現遊びとして大枠の中で捉えることにする。

これらの表現技法のルーツは、現・近代の画家たちが独自の表現方法として、その絵画に取り入れたことから始まる。ヨーロッパ近代絵画の巨匠ピカソやブラックがキュビズムの表現技法として取り入れたコラージュ、同じくヨーロッパのシュルレアリスト、マックス・エルンストのコラージュやフロッターージュ。アメリカ抽象表現主義の画家でアクションペインティングの創始者ジャクソン・ポロックが表現したドリッピング、その系統から日本的な「にじみ」の表現を取り入れたサム・フランシス、ウィレム・デ・クーニングの「ぬたくり」のような表現、などの画家が挙げられる。何れも二十世紀初頭から現代につながる絵画表現技法の大変革である。その表現手法と表現の精神は、美術のみならず都市や生活空間にまで、自由で開放的な現代の様々な表現に大きな影響を与えている。しかし、美術教育では、技法として教科書に紹介はされているが、授業時間数が限られているため、主に技法のみに焦点が当てられる場合が多く、絵を描く中でのその表現の効果と、巨匠たちがモダンテクニクの技法を絵画に取り入れた必然性や時代背景と現代美術に与えた影響を説明する内容が少なく、その表現の有意義性と理念が伝わり切れていないと考えている。

私は、「絵遊び」「モダンテクニク」を、子どもの造形活動の随所に取り入れると、その育ちによい効果をもたらすと考えている。その理由は、テーマを設けることなく、無作為に線を引いたり、色を塗ったり、写し取ったり、貼り付けたりする中で、偶然にできた線や色、かたちの面白さ、複雑さ、美しさを感じ取ることができ、幼児でも容易に取り組むことができる活動であるからである。この表現は、遊びの感覚で活動に取り組むことができ、子どもは勿論のこと学生にとっても馴染みやすく、モチベーションが上がる活動と言える。さらに、活動の過程で、絵の具やクレヨンなどの素材・材料用具に慣れ親しむこともできる。何よりも重要なことは、色や線、形で遊ぶことの楽しさを知ることによって、表現意欲を高め、造形表現の基礎的能力をも培うことになることである。造形表現を楽しむことができる素地を養えば、子どもの心身の発達を順調に促す源になると考える。

2. 絵画表現の四領域での「絵遊び」・モダンテクニクの重要性

子どもの絵画表現は、四つの領域に分けられる。本稿の副題に示した「絵遊び」・モダ

ンテクニック（以降「表現遊び」と表記する）の表現、生活画（体験画）、観察画（静物画）、想像画（空想画）が挙げられる（表-1）。前項で「表現遊び」に関しては、その概要を具体的に説明した。それ以外の三領域は、自分が体験したこと、見たこと、考えたことを表現する活動となっている。つまり、テーマが有りそのテーマから絵画表現することを活動の目的としている。このことは、体験した情景を思い浮かべ絵画表現につなげるか、自身の夢や空想した物語や世界のイメージを絵にするか、もしくは対象をしっかり観察しながら描くという、子どもにとっては高度な表現となる。当然、この三領域も、子どもの心身の発達にとって必要不可欠なことである。しかし、幼児期から生活画・空想画、観察画の活動を主としてしまうと、描くことに苦手意識を持ってしまい、絵を描くことを嫌いになる子どもを少なからず育てることにつながってしまう恐れがある。このことは、保育系の大学・短大に通う学生の絵画表現に関する意識からも窺い知ることができる。

私は、授業の中で学生に絵を描くことが「好き」・「嫌い」を確かめることにしている。その問いに、「嫌い」と答える学生の比率は毎回六割に近い数値を示す。主な理由は、「不器用」「下手」である。直近の図画工作の「表現遊びの振り返り」（1年生103名回答）においても、「上手く描けないから嫌い」と答えた学生が六割近いという現状にある。これは、「上手」に描くことが良いとする、一般の美術に対する概念が大きく影響を及ぼしていると考えられる。では、どういった絵が良いかという点に関しては、ここでは論じないが、ただ、「上手が良い」という考え方のままで、保育者として子どもの表現活動の支援に当たることは、作品主義に陥る原因となりやすい。その結果、お絵かき嫌いの子どもの増やすだけではなく、その心身の発達をも円滑に促さないことにつながってしまう。このことを鑑み、授業では、絵画表現活動の中で「上手が良い」という概念を払拭することを大きな目標としている。そのための具体的手段として、「表現遊び」は最適な活動であると考えている。

以上の観点から、「表現遊び」を授業の中で多く取り入れることによって、学生自身が絵画表現の基本的要素となる、線や色、形の美しさ、面白さ、複雑さや豊かさを活動の中で味わい、感受し、その体験の積み重ねによって、今までの既成概念に囚われない、柔軟で広がりのあるものの考え方や支援力を培う。そのことが、近い将来保育者として関わることになる子どもの育ちにも、良い影響を及ぼすことになるのである。

表-1

絵画表現の四領域

絵遊び・モダンテクニック（表現遊び） 基礎的表現能力を高め、興味や関心、やる気を引き出す		
生活画・体験画 日常生活を頭に思い浮かべ表現することで、生活に対する思いが深まり、心を豊かに耕す	観察画・静物画 モノをしっかりと見ることで、他者を認識し、身の回りに対する豊かな感受性や観察力を養う	想像画(空想画) 空想することで、創造性・想像力を培い、柔軟なものの考え方を育てる



子どもの心を豊かに耕す

※テーマを表現する絵画製作に絵遊びの要素を取り入れると、子どもの表現意欲が高まる。

3. 活動の実践と展開並びに子どもと学生の育ち

ここでは、子どもと学生の「表現遊び」の活動の実際と、その感覚・感触遊びから偶然に出来上がった表現を利用したテーマ性のある表現への展開の方法を検証した。子どもの表現意欲と表現能力の育ちと心の育成に関しては、主に平成13年～平成24年の間、東海付属第一幼稚園の絵画製作非常勤講師として携わった支援の実際から考察した。さらに、造形遊びを通じた親と子のかかわりに関しては、平成16年から10年間に亘って実施した、子育て支援プログラム「遊びの森」（東海学院大学短期大学部主催）の親子支援活動の実践を基に検証した。学生の絵画表現活動に対する意識の変化と支援能力の力量形成については、主に名古屋柳城短期大学保育科で担当する図画工作Ⅰの「表現遊び」の実例と「表現遊びの振り返り」を基に分析・検討した。

1) 転がし遊び（水彩絵の具の色と線の遊び）

転がし遊びは、ビー玉転がしやローラー転がしなどの表現遊びが挙げられる。本稿では、ビー玉転がしを取り上げ、遊びの実際と展開に関して検証する。

具体的な活動内容は、学生の場合は画用紙の四辺を折って箱を作り、パレットに三原色プラス2色、計5色程度の絵の具を水で溶いておく、その際、ビー玉も筆も色数分用意すると活動がスムーズに進む。次にビー玉を絵の具に浸し、筆先で転がしながら表面全体に絵の具をつける。絵の具を付けたビー玉を画用紙で作った箱の中に投入する。箱全体を前後左右に傾け、ビー玉が転がりながら描く線の軌跡を楽しむ。一色のビー玉転がしで、図

- 1のような線の軌跡を表すことができる。おおよそ、4色から5色のビー玉を転がしその軌跡を重ねると、図-2のように線や色の重なりが複雑になり、不思議な美しさを醸し出す一枚の抽象絵画のような表現になる。

子どもの活動では、画用紙で箱を作ってもよいが、小ぶりのバット（水や液体を入れる四角形の平らな容器）や空箱に画用紙を入れて転がし遊びをすると容易に活動が進む。実際に子どもが紙の上にビー玉を転がしてみると、生き物のように転がるその動きと偶然にできる線の軌跡に、感嘆の声を上げて遊びに没頭する。その過程で、ビー玉につける絵具の濃さやつけ方、バランスよく転がす転がし方を工夫する力を身に付けていく。「あ！ビー玉が落ちた」「落ちそうだ」「こうするとうまく転がる」「カーブができた」「生きているみたい！」など遊びの中でその軌跡の不思議さや面白さに気付きながら、試行錯誤を繰り返しコントロールする力や予測する力を自然に培っていく。また、遊んだ後の表現からは、「きれい」「こんな色がある」「絵が走っているみたい」などと、色や線の変化の美しさや、転がる線が表わすスピード感や躍動感に驚きや感嘆の声を上げる。このような体験によって子どもは、表現活動に対する意欲や自信を身に付け、色や線を使って遊ぶことに興味や関心が湧き、感受性や想像力をも培うことにつながる。結果、「表現遊び」の活動は子どもの主体的な心身の発達を円滑に促すこととなる。



図-1 ビー玉転がし1色

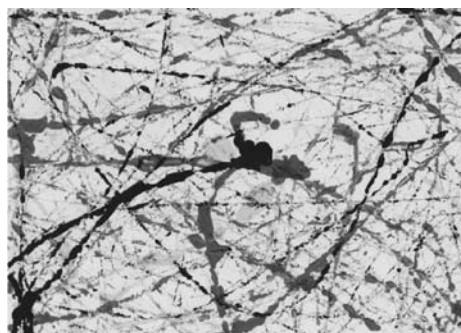


図-2 ビー玉転がし4色

ビー玉転がしは、「表現遊びの振り返り」の中で、多くの学生が楽しかった表現遊びとして挙げている。その内容は「どんな作品になるのか分からないのでワクワク感があり、転がすのが楽しかった」「思い通りに転がらないで、予想しなかったところに転がり楽しかった」「自由に動くビー玉だから、世界に一つの作品ができた」「転がすと不思議な線がたくさんでき、色も混じり合ってきたきれいだった」などである。この記述からは、学生もこの表現遊びを体験する中で、子どもと同じように偶然にできる線や色の重なり的美しさに

感動し、上手く転がすことを工夫しながら活動を楽しむ姿が多く見られる。また、この表現遊びが、子どもの育ちをどのような面で促すのかを体験の中で学びながら、実感として理解し把握することにつながる。このことは、保育現場での学生の表現活動の支援能力と、子どもの心を理解する力をも培うこととなる。さらに、大切なことは、この活動で美術は上手でないといけないという既成概念から少しでも解放されるということにある。

ビー玉のほかに、子どもが片手で持つことができる大きさのゴムボールなどを使うと、より大胆に、活発な活動に発展させることができる。

○転がし遊びの展開（「表現遊び」～テーマ性のある表現）

・ビー玉転がしの紙を貼り絵に使う

ここでは、「表現遊び」であるビー玉転がしで表現された紙を貼り絵に利用して、テーマのある表現につなげる活動について検証する。この活動は、ビー玉転がしを十分に楽しみ、基本的表現能力をある程度培った後、次の段階にステップアップすることを目的とした保育計画の一例である。ビー玉転がしからつながった活動ではあるが、感覚遊びから具体的表現へと一段階ステップアップするため、保育者は子どもが自発的に次の段階に進めるように支援する必要がある。つまり、「こんなことがしてみたい」と思うような言葉がけや環境設定が必要となる。具体的には、子どもが作った貼り絵を保育室にさりげなく飾ってみたり、「この紙きれいだね、何に使えるかな？」などと言言葉がけしたりして、子どもの興味や関心を引き出すとよい。子どもが自らの言葉で新しくやりたいことを話すように言葉がけすると、やる気が湧き、活動がスムーズに進む。

一般的な貼り絵は、折り紙や色画用紙、和紙などがよく貼り付ける素材として使われる。しかし、それらの紙の大方は一色で変化に富んでいない。そのため、単調な表現になりやすい。勿論、数多く色の違う折り紙などを使えば表現の幅は広がる。しかし、そのためには、高度な技術と根気が必要となる。一方、ビー玉転がしで遊んだ紙は、偶然にできた線の軌跡や色の重なりによって、微妙かつ多彩な変化が表されている。このことから、貼り絵の素材に利用すると、思った以上の複雑な効果と表現の広がりを得ることができる。すなわち、子どもや貼り絵に慣れ親しみのない学生にとっても、比較的容易に変化に富んだ貼り絵を表現することができる（図-3・図-4）。この活動は、子どもや学生の絵画製作の表現活動に自信をつけ、やる気や意欲を呼び起こし、主体的成長を促すための一助となると考える。

・そのほかの展開

ビー玉転がしの展開方法として、貼り絵は子どもにとってかなり高度な活動となる。保育計画的に遊びを段階的に考えると、第一段階が転がし遊び、次に、ビー玉転がしの紙を自由にはさみで切って、いろいろな形の紙を作り、保育室の壁や窓に飾って遊ぶ活動へステップアップするのが好ましい。子どもたちがビー玉転がしで遊んだ紙で保育室を飾ることは、保育室が明るく華やかになると同時に、保育空間の中での自然な鑑賞活動も含まれることとなる。



図-3 ビー玉転がしの貼り絵 (5歳)



図-4 ビー玉転がしの貼り絵 (学生)

そのほか、壁面構成の材料の一部として利用する方法も考えられる。壁面構成の製作を特別な活動としてとらえるのではなく、日常保育の中でできた様々な子どもの表現をその中に取り入れることが大切なことと考える。日々、何気なく遊んでいたビー玉転がしの表現が、壁面構成を作る重要なパーツとして再利用されることを体験することは、子どもに意外性の発見や驚きなど新鮮な感動を呼び起こす。このことによって、発想力や柔軟なもののお考え方を培い、子どもの心身の発達はより主体的に自然に促されていくと考える。壁面構成の製作に、「表現遊び」などで作った作品の偶然の美しさ、面白さを生かす工夫をすることは、前述したように、日常保育そのものを豊かで広がりのあるものにする一助なると考える。

下記に、ビー玉転がしの遊びでの子どもと学生の具体的育ちを箇条書きにまとめる。

- ・体の動きがビー玉の軌跡につながることを体験し理解しながらバランス感覚を養う。
- ・偶然にできた線や形・色の重なり的美しさや面白さに気付き、感受性を高める。
- ・抽象的な表現を受け止めることができるようになる。
- ・色や線を使った表現遊びを積極的に取り組むことができるようになる。
- ・偶然にできた表現を、他の造形活動にも利用することができる柔軟性を培う。

2) スタンピング（水彩絵の具の色と形遊び）

型押し遊びとして、幼稚園や保育所でよく取り入れられる表現遊びである。印鑑を押印することと同じ内容であるため、学生にも馴染みがあり容易に取り組むことができる活動とあってよい。また、平易な活動である一方、多種多彩で複雑な表現を得ることもできる。そのため、保育の造形遊びに取り入れると、子どもにも魅力的な表現活動となる。遊びの展開も印材が身の回りに豊富にあるため、保育の内容自体も変化に富み、活気と広がりのある活動になると考える。さらに、多様な印材でスタンピング遊びをすることで、子どものやる気や意欲を促し、想像力を培い、柔軟な思考力をも育て、その心身の発達にも良い影響を与えることとなる。

一口にスタンピングといっても、その印材は、手形や足形、紙や段ボール、紐・綱類、木の葉、プラスチック製の容器や蓋、布・レース、野菜、発泡スチロール、スポンジ、使わなくなった歯ブラシ、金属製品、文具など枚挙にいとまがない。つまり、多くの印材を日常生活の中で容易に見出すことができるのである。このことは、この表現遊びが生活の中で日ごろ何気なく使っている「モノ」を造形表現の材料として利用するということになるのである。この体験が、造形表現は特別なことではなく、生活の中にリンクした活動であるという意識を、自然に子どもや学生の心に培うこととなる。その証は、表現遊びの振り返りの「スタンプ材の材料集めが楽しかった」という学生の記述からも窺い知ることができる。さらに、身の回りの物をスタンピングの材料として使うことは、身の回りにある他の「モノ」に対する認識・理解を深め、生活環境に対する感受性をも育てていく。図-5に、スタンプされた様々なスタンプ材の印影を具体例として示す。

活動内容は、保育所などで行う場合は、水で溶いた水彩絵の具を小型のバットやトレイに注ぎ、そこに、キッチンペーパー（水に溶けない紙）やぼろ布などを浸したインク台をあらかじめ用意しておく。さらに、印影がくっきり写し出されるように、一人につき新聞紙夕刊一部程度を下敷きとして用意するとよい。また、スタンプ材を洗ったり手を拭いたりするためのバケツや布巾も用意する必要がある。色数は、一色でもよいが三原色を基本に三色位のインク台を用意するとよい。色数が多くなると、同じ印材の色違いのパターンや自然な色の重なりなどが表され、子どもの興味や関心の持続時間が長くなり、色や形に関する学びも広がる。スタンピングの活動内容の変化に応じて、最も多い色数で五色くらいのスタンプ台を用意してもよい。それ以上多くなると、子どもは色数の多さに驚き、喜びはするが、スタンプ遊びをする集中力がそがれてしまい、とりとめのない活動になって

しまう恐れがある。

スタンプする印材に関しては、日常の保育の中で使っている身の回りの物や野菜を利用することが望ましい。そのように配慮することが、先に述べたように日常生活や環境に対する子どもの感受性を育むことにつながる。

スタンプ材の中で野菜は、カットする方向や面を創意工夫することで、印影のバリエーションが広がり、子どもや学生の柔軟な思考を培うには良い印材として挙げられる。例として人参を取り上げ、一本の人参から、如何に簡単に数多くの印影を作ることができるかを具体的に説明する。人参を横にして輪切りの形を作る場合、太い部分と細い部分で切り分けることにより、輪切りの形の変化が増す。輪切りにしたものを半分もしくは四分の一にカットしても変化が広がる。さらに、縦方向に直線で切ったり斜め切りにしたりするなどしても、変化に富んだ形を作ることができる。人参一本でも図-6のように多くのバリエーションを得ることができるのである。また、スタンプする面も縦にしたり横にしたりすることで、その表現の幅はさらに広がる。このように、食材である一つの素材で、スタンプ型のバリエーションを創意工夫しながら試行錯誤して作ることは、その過程で子どもや学生の想像力や創造性、柔軟な思考力を培うことにつながる。実際、学生の振り返りでも「カットの仕方で違う野菜の断面が面白かった」と記述している。また、一つの形を同じ色や違う色で何回もスタンプするだけでも、スタンプされた形の繰り返しが不思議なリズムを醸し出し、デザイン的な造形感覚をも培う。そのことで、子どもたちの興味や関心を促し、活動を活性化していく。さらに、写し出された身の回りの物の印影を見ることで、慣れ親しんだ物を違った側面から認識し、子どもの想像力を高めていく。



図-5 スタンプ材の種類



図-6 人参のバリエーション

○スタンピングの展開

前述したように、ただスタンピングする活動のみでも、子どもの心身の発達は遊びの内に円滑に促される。さらに、ここでは、印材である様々な素材をスタンピングして、写し出される形の印影を認識しながら十分に楽しみ、体験を重ねた後に、次へステップアップする活動について考察する。

・色画用紙にスタンピング

同じスタンプをする活動でも、白い画用紙と色画用紙では、使う色画用紙の色によってスタンピングの色の使い方に大きな違いが生ずる。白い画用紙であれば、白色の絵具以外はその印影は大方くっきり写し出すことができる。しかし、黒い色画用紙に型押しする場合は、黒や紺、暗褐色系の色を使うと判別しにくく、その印影を認識することが難しくなる。当然のことではあるが、色画用紙と同系色の絵具は使うことができないということである。対策としては、黒色など暗色系の色画用紙や色味の濃い色画用紙の場合は、明度の高い色を使うか使う色に白を加えて明度を高くすると、形を明確に写し出すことができる。そうして色画用紙に表現された色彩のコントラストは、白い画用紙にスタンピングした場合とは違った、華やかで厚みのあるデコラティブな美しさを楽しむことができる。その、色彩表現の違いを感受することで、新たな色彩感覚をも培うこととなる。

・スタンピングで具象表現する

スタンピング遊びから、様々な物の印影の面白さやその意外性を体験し、十分に楽しみ、活動に慣れ親しんだ後、ステップアップした表現として、スタンピングを使って具象表現につながる活動が挙げられる。図-7はスタンピングで表現した子どもの絵である。輪切りにしたピーマン、ジャガイモ、オクラをスタンプ材にして、繰り返しスタンピングしながら餅つきの情景を表現している。ここでの特徴的な表現手法は、連続してスタンピングすることで情景や物の形を表していることである。野菜が、もはや子どもにとってクレヨンや筆と何ら変わらない描くための道具となっているのである。ピーマンをいっぱいスタンピングして空もしくは雲を表し、輪切りの太い部分は花になり、輪切りしたジャガイモの大小を使い分けて、ウサギの体や太陽、花の茎や葉っぱを表している。実によく工夫され、驚くほどの柔軟性と子どもらしい想像力が伝わってくる素晴らしい表現といってよい。

図-8は学生がスタンピングで製作した魚の絵である。木の葉を繰り返しスタンピングして魚の体を表し、小ぶりの容器を使い大きな目をしている。今にも動き出しそうな、新鮮で生き生きとした闊達な表現になっている。本来、子どもの絵に見受けられ生命感や躍

動感、その子らしいものの見方、表し方は成長するに従って失われるが、この学生の絵は、子どもの絵のように生命感が溢れているのである。理由は、スタンプングの型押しする単純な動作の繰り返し自体が、余分な作為や説明的な描写をそぎ落とし、必要最小限の表現で魚を表しているのが功を奏しているからである。

「子どものころは天才、大人になるとただの人」は、よく言われることである。いろいろな常識、物差しを身に付けたころから、無機質で、パターン的な魅力のない絵になることが多く見受けられるようになるのが現状である。スタンプングの表現を取り入れることで、学生も子どものように夢のある表現を獲得することができるのである。さらに、その表現が既成概念からその心をも解き放っていくのである。



図-7 餅つき (5歳)

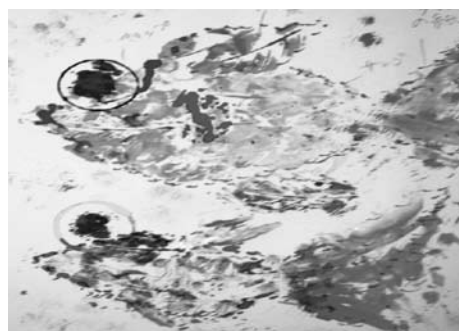


図-8 魚 (学生)

・スタンプング遊びからごっこ遊び(衣装づくり)

図-9は、子どもが全紙大の模造紙に、様々な形を繰り返しいろいろな色でスタンプングを行っているところである。ここで紹介するスタンプング遊びの展開は、スタンプされた全紙大の紙をプリント柄の生地に見立てて、衣類などを作り、それを実際に身に着けて遊ぶ活動である。日常の保育に取り入れてもよいが、親子支援活動のイベントなどで行うと、共に製作する過程で家族の一体感、絆も強くなり、親の表現遊びに関する理解も深まり、支援活動の効果が一層増す。

この活動の特徴は、目的が明確であること、一つの遊びに何段階のステップアップが含まれていることにある。つまり、自由なスタンプング遊びから目的を持ったスタンプング遊び、なりたいもの作りたいものをイメージして想像する。次に、イメージしたものを製作する。そして、実際に身に着けて遊ぶことで、変身する喜びや達成感へとつながる。この、一連の表現遊びの過程で、自然に子どもの表現能力を高め親と子の心のつながりをも

耕すことになるのである。

具体的支援として、スタンプ遊びの過程では、「素敵な模様のついた服や帽子を作るプリント生地にするので、たくさん型押しして楽しくしよう！」などと言葉がけをすれば、遊びに目的意識が加わり、意欲的で活発な活動につながる。また、親子で参加の場合は、事前にスタンプ遊びが衣類作りにつながっていることを保護者に説明すれば、スタンプ遊びが具体的表現につながることをイメージすることができ、活動に加わるモチベーションも高くなる。さらに、保護者は、経験から衣類づくりに関する知識も少なからずあるので、子どもと話す語彙も豊富になり、親と子の会話も密となる。

図-10は、子育て支援プログラム「遊びの森」で実施したスタンプ遊びの活動で、スタンプのプリント生地から子どもが作ったお姫様の衣装である。童話かアニメのようなお姫様になりたいと、一生懸命考えながらドレスだけでなく冠やブレスレットまで作った。その他にも、お父さんのネクタイや時計、空飛ぶマントやベルトなど、紙のプリント生地からできた様々なものは、驚くほどに想像力が発揮されていた。実際の衣装づくりの過程では、親と子が互いに言葉を交わしながら、創意工夫、試行錯誤を重ね、共に製作しながら濃密な時間を楽しく過ごすことができていた。この活動で、「表現遊び」からテーマ性のある活動につなげる意義の大切さを再確認できたと考えている。

学生もまた、「表現遊び」からテーマのある表現活動、その表現を使ったゴッコ遊び、この一連の活動を支援する過程で、子ども若しくは親と共に表現する喜びを体験し、支援能力をも培っていく。

また、親子支援のイベントに参加した記念として、家族の手形を製作するとよい。スタンプした生地の絵の具が乾くまでの遊びとして、その絵の具を利用して、家族の手形



図-9 スタンプの生地作り



図-10 お姫様に変身

を押す(スタンピング)。その手形に日付と年齢を書き、その周りを好きな形に切り取り、好みの色画用紙に貼って持ち帰るようにする。この記念の手形は、ここでの体験の思い出となって心に残ることになるのである。

3) バチック(はじき絵)

バチックは、モダンテクニックの中でも幼児(年中以上)が絵画製作でよく使う表現技法である。例えば、4歳ぐらいになるとクレヨン・クレパスで画面の下に一本の線(基底線)を引き、場を想定するようになる。その上に、体験したことや見て知っていること(人、生き物、家や草花や木)を描き、画面の上部に下に描いた線と同じように一本の線(おび空)を引き、一つの情景として絵を表現するようになる。クレヨン・クレパスで描いた絵を子どもは、自身が思ったこと、感じたことを鮮明に豊かに表現するために、今度は、描いた形の上から水彩絵の具で空気や風、水や光を表現するように、青色や水色、黄色などを描くように塗る。図-11は、五歳児の雨の日の絵である。基底線が描かれ情景として一枚の絵が表現されている。画面の中には、雨をクレパスのグルグル線で表し、その上から青や水色の水彩絵の具を塗って、今まさに降り続けている雨のみずみずしさを、バチックの技法を使って見事に表現している。

バチックは水性と油性の離反作用を生かした表現方法である。クレヨンやクレパスで描いた形や線は、水彩絵の具を上から塗ってもはじいて浮き出てくる。このことから、子どもが描きたい物や情景を豊かに表現する技法として、普遍的に取り入れられているのである。この技法を使って絵を描くと、表現の幅が広がり、達成感や充足感も深まり、絵を描く活動にたいする意欲も高まる。そのことが、主体的な心身の発達にもつながっていく。

絵を表現する技法として、バチックを子どもが自然に取り入れるようになるには、最初から前述したような具体的な表現から始めるのではなく、まず、バチックの原理を「表現遊び」の中で体験しながら、無意識のうちに身に付けていく過程が必要となる。クレヨンやクレパスに関しては、一歳頃から使い始めるが、水彩絵の具は、フィンガーペインティングや「ぬたくり」(水彩絵の具で行うなぐりがき)など、絵の具遊びとして二歳ごろから体験し始める。そして、筆が扱えるようになる三歳ごろから、クレパスなどと水彩絵の具を組み合わせたバチックの表現を楽しむことができるようになる。このことから、バチックを使った表現遊びは、水彩絵の具で表現する機会が多くなる三歳前後から始めるのが適当であろう。具体的には、「ぬたくり」などの絵の具遊びの体験と並行して、バチックを使っ

た表現遊びを行うとよい。子どもは、水彩絵の具がはじかれることに驚き、不思議さを感じながら、興味や関心が高まり、この遊びに没頭する。この体験の積み重ねが、バチックを無理なく表現に取り入れることができることにつながる。

○バチックの展開（「表現遊び」～テーマ性のある表現）

・レ点の繰り返しと花火のバチック遊び

図-12の「連続するレ点と花火」の表現遊びは、バチックの原理を感覚的に楽しみながら、その面白さや不思議さを自然に理解することができるので、子どもは勿論のこと学生の表現遊びにもよく取り入れている。遊び方は、明るい色のクレパスを三色程度、各10回、白い画用紙にレ点をチェックするように強めに描いていく。描かれたレ点の上に、黒の水彩絵の具を水でよく溶き、太い筆であまり筆圧をかけないようにして柔らかく塗り被せる。黒い絵の具を塗り被せる過程で、子どもも学生も、絵の具をはじいてくっきり浮き出るクレパスの痕跡を見て、毎回感嘆の声を上げる。ここでは、浮き出る驚きとともに触覚的快感も得ることができる。レ点を描くクレパスの色数は一色でもよいが、ステップアップの活動として用意したバチックの花火遊びにつながるように、三色程度にするとスムーズに活動が展開する。



図-11 「雨の日」五歳児

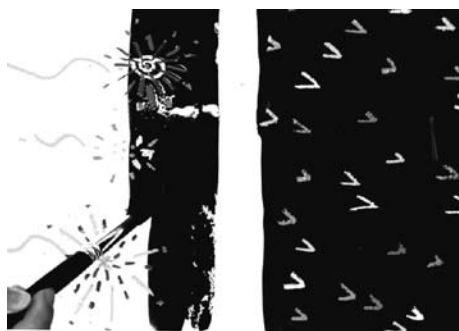


図-12 「連続するレ点と花火」学生

バチックの花火遊びは、レ点の連続遊びと違い花火を描くというテーマが付加される。しかし、遊びの連続として、レ点遊びからステップアップすれば、ごく自然にバチックの効果を利用して、子どもも学生も多彩で華やかな花火を表現することができる。表現遊びの振り返りにも「絵具を塗ると一気に花火が上がった」とその時の喜びを記述している。その達成感や自信が、次の造形活動へのやる気につながり、自らを主体的に成長させていく

ことになるのである。

・バチックの雨・雪が降る

この遊びは、レ点の連続遊びと類似しているが、雨や雪を降らすというテーマがあり、目的が明確なので、子どもにとっても理解しやすく、遊び感覚で取り組みやすい活動である。まず、白い画用紙全面に、白いクレパスで思い思いの雨や雪の形をいっぱい描く。そして、その上から水色や青、黄色、赤、紺色、黒などの色で、白一色の画面に絵の具をたっぷり含ませた筆で空や空気を描くと、クレパスで描かれた白い雨や雪がたくさん浮き出て、降り続けているような動きのある絵が表わされる。この遊びで、表現活動に対する子どもの興味や関心、表現意欲も高まると考える。さらに、雪や雨に対する情緒性も培われる。

この表現遊びで、「雨を降らす」をテーマにした場合の保育者の支援をここで紹介する。雨をクレパスで描く時点で、子どもの活動を活性化させるため、様々な雨の体験の話をするとう効果的である。例えば、大粒の雨玉、小さな雨玉、細かい粒のような雨、横殴りの激しい雨などと具体的に雨のイメージが広がるように言葉がけするとよい。さらに、雨の降る音を連想できるような擬音を子どもとともに探し出し、「ザーザー」「しとしと」「ぽとぽと」「ピチャピチャ」などと唱和すると、子どもの遊び心が触発されイメージも広がる。このような言葉がけから、子どもは自分が好きな擬音を繰り返し唱えながら、画面一杯に雨を描いていく。この支援の在り方は、幼稚園教育要領の領域「表現」の改訂の要点に記されている「内容の取扱い」に新たに示されたねらいの内容と合致すると考える。

※豊かな感性を養う際に、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。(幼稚園教育要領から抜粋)

・「雨の不思議な棒」(バチック遊びから具体的情景の表現)

図-13は、バチックの技法を使って雨の日の情景を表現した学生の絵である。ただ水彩絵の具をはじくことの面白さや快感を味わう遊びから、雨、雪降りなどの簡単な表現遊びにステップアップし、さらに、進展した表現活動がこの「雨の不思議な棒」である。対象年齢は年長児以上が適齢である。これまでは、バチックの描画材としてクレパスかクレヨンを使っていたが、ここではそれを変え、油性の描画材としてクレパスの代わりに蠟燭を使用する。つまり、蠟燭が雨を降らせる棒となる訳である。子どもは、「ロウソクが雨を降らす棒になる!」と、いつもの絵を描く画材とは違うことに興味をそそられ、新鮮な思いを抱いて活動に取り組むことができる。蠟燭で白い画用紙に雨を降らせることは、白いクレパスなど違い、その痕跡は透明なため見定めることが難しく、子どもには、本当に

雨が降っているかどうか判別しづらい。しかし、蠟燭で雨を降らした後、水彩絵の具で雨の日の情景、生き物などを描くと、透明な雨が画面に降らただけ現れるのである。筆で描けば描くほどたくさんの雨が形になって現れるので、子どもは、その不思議さに驚きながら表現意欲を高めることができる。

支援に関しては、雨を降らす段階では、雨を降らすだけのバチック遊びで記述したように、雨の具体的様子を話したり、雨の擬音を唱和したりすることで活動を活性化させることができる。次に、情景を水彩絵の具で描く段階では、「雨の中には何がある」「雨が好きな生き物は」「雨が降らないと花も咲かないね」「野菜や果物、お米もできないよ」などと言葉がけすると、子どものイメージが広がり活動が活発化する。さらに、自然環境や雨の大切さも伝わる。支援しても描き出せない子どもには、「空にいっぱい雨も面白いよ」などと言葉がけするとよい。少しだけ描いてすぐにできたという子どもには、「雨の中のお友達をもっと描くと、たくさん雨が降ってくるよ」などと言葉がけすると、描く意欲が高まる場合が多い。

学生もまた、蠟燭が絵の具をはじいて現れる雨の不思議な情景に引き込まれて、描くことを楽しんでいる。この、体験が子どもの気持ちを理解し、共鳴・共感することができる、保育者として必要な豊かな感受性と支援能力を育んでいくと確信している。



図-13 「雨の不思議な棒」学生

4) マーブリング・染めの表現活動

マーブリングと染めの表現活動は、大学の図画工作の授業の最初に必ず行うことにしている。その主な理由は、本稿の「2. 絵画表現の四領域での「絵遊び」・モダンテクニックの重要性」で示したように、絵を描くことに苦手意識を持つ学生が毎年六割に近い数値を示す現状を考慮した結果からである。つまり、美術は絵を描くのが下手だから苦手という学生に対して、色や形で遊ぶことの楽しさや色彩が醸し出す表現の豊かさを、筆やクレパスで物を描くのとは違い、偶然性が強いマーブリングや染めの表現遊びを通して感じ取ってほしいからである。実際、授業の最後に行う表現遊びの振り返りでも、楽しかった表現遊びとしてマーブリングや染めを挙げた学生が一番多い。その内容は、「一瞬で染まる複雑

な模様に驚いた」「幻想的で美しく予想外の模様ができた」「水面に落としたりした色の広がりを
見るのが楽しかった」「写し取られた模様が水面から取り上げてみないと判らないのでわ
くわくした」「染め終わった後の折った紙を開くときワクワクした」などと、この表現遊
びで感じ取ってほしいことを、多くの学生が実体験での感想として記述している。この表
現遊びで感じた驚きや喜び・期待感、それに伴う新鮮な発見は、「美術は下手だとだめ」
という概念を少なからず取り除くと考えている。また、子どもは遊びの中で主体的に育つ
ということが、具体的にどのようなことかを、その体験を通して自然に理解することにも
つながる。言葉で理解するのではなく、学生自身が実体験で学んだことは、保育者として
の総合的な力量を確実に身に付けることができると思う。

マーブリングとは、版画の一種で版形式は平版であり、モノプリント（一枚しか刷ること
ができない版画）の種類に属す。バットに入れた水の水面にマーブリング絵の具を落と
し、棒などで僅かに流れを作り、そこに浮かび出たマーブル（大理石）模様に紙を被せ、
素早く取り出すと、被せた紙の面には繊細で複雑な美しいマーブル模様が鮮やかに写し取
られる（転写）。前述したようにこの模様を見た時の学生は、驚きと喜びに満ち、自ら進
んでマーブリングの活動に積極的に取り組んでいく。当然、人生の中で一番感受性が豊か
な時期である子どもは、学生以上に活動を活発化し、様々な発見をしながら心身の発達を
促していくこととなる。さらに、授業でのこの活動は、水を満たしたバットを中心に5～
6人のグループで行うので、その表現の美しさや不思議さから得る心の育ちとともに、そ
の感動を共有する喜びと一体感が、互いの理解を深めていくことにもつながる。学生のコ
メントからも、「自然と周りとのコミュニケーションが取れ、協力することができた」など、
相互理解が深まった様子を窺い知ることができる。実際、活動中の状況からも、マーブ
リングをする水を満たしたバットを中心に、絵具の落とし方や水面にできた模様の様子を伝
えあったり、吸い取った模様の出来に感嘆の声をかけあっている姿が多く見受けられる。

マーブリングに使う絵具は、市販されているマーブリング絵の具が子どもにも学生にも
扱いやすい画材である。そのほか、墨汁や油絵の具等が挙げられるが、色彩の多彩さや扱
いやすさなどを考えると、保育の表現遊びにはマーブリング絵の具が最適であると思う。
また、紙は画用紙でもよいが、吸水性の高い和紙を使うと模様を美しく写し取ることがで
きる。和紙は板じめ和紙を使うと容易に活動が進む。そのほかの和紙を選ぶ場合の注意点
として、半紙は安価で手に入りやすいが、薄すぎて簡単に破れてしまうので避けた方が良
い。無地の障子紙は使いやすく安価である。

染めは、日本の伝統工芸として日本人には馴染みの深いものである。ここで取り上げる染めは、伝統工芸の染色をルーツにして、子どもでも簡単に取り組むことができる和紙を使った「折り染め遊び」である。その方法と効果について検証し考察する。

「折り染め遊び」に使う染料は、ベストは和紙染めの染料であるが、マープリング絵の具や不透明水彩絵の具・ポスターカラーなどでも楽しむことができる。紙は和紙を使うが、専門の板じめ和紙以外では、障子紙も使うことができる。半紙は安価に手に入るが、前述したように破れやすいので避けた方がよい。遊び方は、紙を折ることから始めるので、幼児の場合、折りやすいように一辺 15cm位の正方形に和紙を切っておくとよい。折り方は、三角形や四角形を繰り返し折る方法を保育者が指導することが基本となる。折る活動に慣れてきたら子どもが自由に折っても面白い模様になる。また、くしゃくしゃにして染めるだけでも、十分に染めの効果を得ることができる。染料（水彩絵の具可）は、3～5色トレーなどに用意し、折った紙の角や辺を浸して染める。染めた紙を開いたときの子どもの反応は、学生たちと同様に驚きと喜びに満ち、活動が活性化する。

学生の活動は、紙の折り方は自由にする。基本となる三原色の染料をトレイなどに用意して、折った紙を部分的に染料に浸して色を吸い取り、ぼろ布で押し拭きする。この活動を一色で一回、計三回行う。押し拭きは、和紙が確実に染まることと、他の染料と色が混ざらないために行う。染めた紙を広げると、思いもよらぬ複雑な模様が表れる。折り方や染料に付ける順番、浸す分量の違いによって多彩なバリエーションを表現することができる。先に述べた学生の感想にもあるように、「想定外の模様ができるので紙を開くときワクワクした」など、驚きや喜びを感じることでモチベーションも上がり、主体的な活動が広がる。

○マープリングと染めの展開（「表現遊び」～テーマ性のある表現）

・マープリングした紙と染めた紙を使った貼り絵

ビー玉転がしの展開でも、遊んだ紙を使った貼り絵の表現を紹介し、その効果について記述した。マープリングした紙と染めた紙を利用した貼り絵も、ビー玉転がしの貼り絵と同様、既存の色画用紙や折り紙などとは違い、その紙自体が複雑な模様や色合い、微妙な調子を表しているなので、豊かで広がりのある貼り絵の表現になる。さらに、この二種類の違った模様を貼り絵として同時に利用すると、マープリングは中間色系の繊細な模様、染めは原色系のカラフルな模様となるので、図-14のように想像以上にメリハリのある複雑で効果的な表現になる。しかし、子どもや学生にとって表現遊びからステップアップし

た高度な活動となる。そのため、支援者は、遊んだ紙を使って表現活動することの楽しさや想像力が膨らむような言葉がけをすることが必要である。特に子どもには、「いろいろな色や模様があって楽しい紙だね」「この模様動いているみたい」「模様が取れた時は、手品みたいでびっくりしたね!」「たくさんの色を紙につけて模様を作ったね」などと言葉がけすると、イメージが広がり楽しみながら活動に取り組む誘因となる。技術的側面では、ビー玉転がしの貼り絵は台紙に色画用紙を使ったが、ここでは、台紙を白い画用紙にするとマーブリングと染めの模様が生かされ、鮮やかな表現を得ることができる。学生の振り返りでも「マーブリングと染めの紙を使ったアートは色鮮やかで楽しかった」「思った以上に素敵な絵になった」などと感想を述べている。

この貼り絵の活動は、指先で細やかな作業ができるようになる5歳児位が適齢であろう。マーブリングや染めの表現遊びを十分に楽しんだ余韻が残っている時期に、遊んだ紙を使って具体的表現活動につなげると、子どものやる気も増す。そこで、大人が適切な言葉がけをすれば、無理なく活動に取り組むことにつながる。ただ遊んで楽しただけで終わらず、遊んだ紙からイメージを膨らませ、自分の想像したことを創意工夫しながら貼り絵として表現することは、健やかな子どもの心身の発達にとって大切なことであると考えられる。

学生もまた、マーブリング・染めの表現遊びを通して、色や形の美しさやそのバリエーションの面白さを楽しみながら味わうことで、充足感と表現遊びの大切さを実感する。その体験を基に、そこからステップアップした活動として、貼り絵の表現に取り組む。表現遊びした紙を創意工夫して具体的な表現につなげる体験から、その道筋が、如何に心身の発達に有効であるかを実践的に学び、保育者としての力量を育てていくことになる。

マーブリングと染めの和紙は、貼り絵のほかに小物入れなどの工作に利用しても面白い。

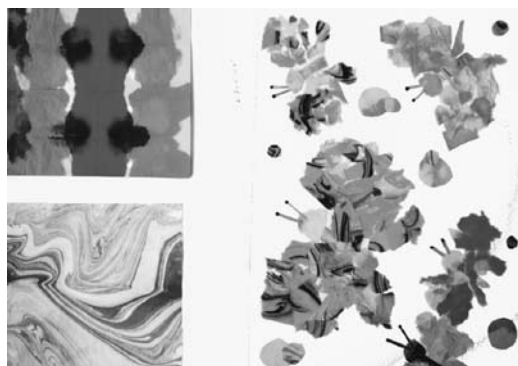


図-14 マーブリングと染めの貼り絵(学生)

5) コラージュ

コラージュは貼り絵の中に分類されるが、貼り絵と異なる点は、紙以外の様々な物を貼って製作する点にある。貼る材料は、自然材（植物、土、砂、石など）、人工材（プラスチックの容器や蓋、紐、糸、モール、スポンジ、紙コップや紙皿、スチレンのトレイなど）である。クレヨンや水彩絵の具の代りとして、自然や生活空間に在るあらゆる物（廃材を含む）を貼りつけることで、絵画表現が成り立つのである。さらに、コラージュで表現遊びをすることは、身の回りに在るさまざまな物に対する認識を育み、質感そのものを製作の中で知り、それらをより深く理解することにもつながる。また、いつもとは用途が違うことに活用することで、柔軟な物の捉え方を育み、工夫する力も育て、環境に対する見る目をも新たにできる。このことは、表現遊びの振り返りの中で、好きな表現遊びとしてコラージュを挙げた学生のコメントからも「紙にいろいろなものを貼り付けることで、触り心地や立体感など、絵を描く時とは違う楽しみを味わえた」「普段、気にも留めないものが絵を表現する材料になり、新しい形に姿を変える過程が楽しかった」「どんなもので貼り絵を作るか、材料集めをするのが楽しかった」など、その表現能力と柔軟な思考力の成長と身の回りの物に対する感受性が育まれたことを読み取ることができる。

子どものコラージュ遊びの場合は、集めたものを貼り付けるのみの活動から始め、自然材や人工材の質感や色彩の豊かさを体験して素材に慣れ親しんだのちに、壁面構成などのテーマのある表現にその活動を取り入れると、環境に対する豊かな感受性と表現能力を効果的に育んでいく。

活動の留意点としては、貼り付けるベースは、子どもの造形遊びには中厚以上の画用紙が扱いやすい。また、接着剤は、様々な素材を貼り付けることから、でんぷん糊などは避けた方がよい。ボンドを使うと大方の物は貼り付けることができる。貼り付ける物は、子どもの活動を前提としているので、貼り付けることが難しい金属類は使わないことにする。草や木の葉などを使う場合は、保育者があらかじめ新聞紙などに挟んで、水分を抜いてフラットにしておくことで活動がスムーズに進む。「材料集めをするのが楽しかった」という学生のコメントにもあったように、自然材を使ってコラージュ活動をする場合は、散歩のときに、お喋りしながら子どもたちと貼り付ける木の葉や小枝、木の実や小石などを見つけて集めるとよい。そのことで、身近な自然に対する感受性も生まれ、これから始まる活動へのモチベーションも高まる。人工材、廃材などを利用する場合は、保護者に依頼すると、親子の共同作業にもつながり、保育に対する保護者の理解も深まる。

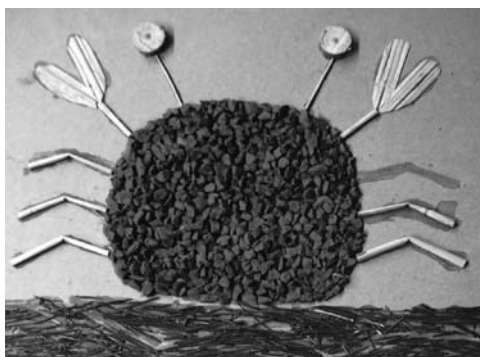


図-15 砂利と枝、木の葉のコラージュ



図-16 壁面構成 毛糸と紙皿をコラージュ

○コラージュの展開

・壁面構成の製作に生かす

壁面構成の概要は、保育室や遊戯室、廊下や階段の壁面に子どもたちが製作した造形作品などを貼り付けて、季節の移り変わりが自然に子どもたちに伝わるようにしたり、運動会や遠足などの行事の楽しさを伝えたりするための園内装飾の総称である。

保育者は、幼稚園・保育園で様々な行事や季節の変わり目に子どもと共に、壁面構成の造形活動に取り組むことが多くなる。そのため、授業の中でも壁面構成の製作は必ず実施している。授業での壁面構成製作の留意点としては、子どもの活動が中心となった製作計画の立案を大切な条件としている。さらに、一年半に亘る美術系科目の内容のつながりを重視しているので、1年生の図画工作 I で取り組んだ「絵遊び」・モダンテクニックの表現遊びを活用することも必要条件としている。図-16は、学生（保育科2年生）が製作した壁面構成である。「いもほり」がテーマで、その芋は、紙皿を使って幼児でも容易に表現できるように考えられている。そのほか、毛糸やモールを随所にコラージュし、楽しくて躍動的な芋ほりの壁面構成になっている。コラージュの表現遊びを壁面構成に応用することで、学生の造形表現に関する保育力が培われた良い例であると考えられる。また、このように、身近な材料を自由に使って、壁面構成を子どもと共に楽しみながら製作することができれば、保育者と子どもの一体感が深まり、保育室も明るくなると同時に子どもの達成感や造形感覚をも養い、心身の発達をも順調に促すことになる。

4. 表現遊びの振り返りからの考察

「絵遊び」・モダンテクニックの活動は、1年前期の図画工作 I（半期1単位）の中で、

授業の初回から8～9回に亘って行っている。この中には、授業ガイダンスや遊んだ作品のファイリング、表現遊びの振り返りの記述の時間も含まれているが、結果として、全授業回数の半分以上を割いていることになる。このことは、学生が十分に表現遊びを体験しながら楽しむ過程で、思いがけない表現を認めることができる柔軟性を培うこと、美しさや面白さ、様々な変化を見過ごすことなく気付くことができる豊かな感受性を養うこと、一般的な美術に関する既成概念を払拭すること、を目標しているのでこれだけの時間は必要不可欠であると考えている。この表現遊びから、後期の図画工作Ⅱに続き、二年の表現Ⅱ（造形）につながる基本的な造形表現の理念と表現能力を身に付けることになるのである。目標はそこにあるが、幼いころから植え付けられた既成概念を全て取り払うことは、個人的な資質や気質も相まって、現実的には難しいところもある。そのため、表現遊びの振り返りを作成し、活動後の学生の思いと意識の変化について調査・考察し、授業内容の刷新に努めている。

ここでは、2020年度保育科一年生、図画工作Ⅰ（103名）の振り返りの内容から学生の意識の変化を読み取り、表現遊びの効果とその学びを検証する。

検証の核となる、表現遊びの振り返りの内容を次の枠内に太字で示す。

表現遊びの振り返りの項目

1. **絵を描くことが好きですか嫌いですか。どちらかを○で囲ってください。**

好き	嫌い
----	----
2. ○絵を描くことが嫌と答えた人は、どんなところが嫌いか記述してください。
 ○絵を描くのが好きと答えた人は、どんなところが好きか記述してください。
3. 楽しかった「絵遊び」・モダンテクニックを挙げてください（複数回答可）。
4. 楽しかった「絵遊び」・モダンテクニックの、どんなところが面白かったか記述してください。
5. 苦手な「絵遊び」・モダンテクニックはありましたか。その技法を挙げて、苦手な点を具体的に記述してください。
6. 「絵遊び」・モダンテクニックは、幼児の造形遊びにどのようなところが効果的だと思いますか。
7. 「絵遊び」・モダンテクニックの活動から学んだことを記述してください。
8. 「絵遊び」・モダンテクニックを実際の保育でどのように活用するか、保育者になった時を想定して具体的に記述してください。

振り返り項目の1～4に関しては、これまでの論考の中で随所にコメントを紹介し、考察を重ねた。ここでは項目5～8の学生の記述を軸に考察を進める。

項目5の苦手な表現遊びに関しては、約9割(103名中90名)の学生が何らかの遊びを各自一種類挙げていた。その中でも一番多くの20名の学生がドリッピングを挙げていた。そのコメントは、「ストローで息を吹き込むと、酸欠になって頭がくらくらした」と、体力的にきつかったと言う内容がほとんどであった。対応としては、ストローを細くすることと、画用紙に落とす色の量を増やすことである程度改善できるのではないかと考えている。そのほかの遊びでは、3～6名の学生が表現遊びの技術的問題で上手くいけなかったと記述していた。このような技術的問題に関しては、説明のしかた等で解決できると考えている。しかし、マーブリングと染めやビー玉転がしの表現遊びから具体的表現に展開する活動で、「絵を描くのが苦手なため」とのコメントが数人見受けられた。このコメントからは、絵が下手なのはだめだという意識が根底にあり、表現することを楽しめない姿が根強く残っていることを読み取ることができる。具体的な表現が苦手な学生には、模様のように表現することも良いと説明しているが、短い期間で苦手意識を払拭することの難しさが浮かび上がった。解決策としては、授業の個別支援で今以上に一人一人の学生にきめ細かく言葉がけすることを心掛けたいと考えている。しかし、苦手な遊びがあると答えた学生も、表現遊びの効果とその有意義性に関しては全員肯定的意見であった。

振り返りの項目で最も重要視しているのは、項目6と7の「絵遊び」・モダンテクニクの活動の効果と学びについての学生のコメントである。その内容は、素直な気持ちが綴られており、活動のねらいとしていた理念が、ある程度学生に身に付いたのではと思われるコメントが多々見受けられた。

項目6の学生の記述では、「ただ絵を描くのではなく、いろいろな道具を使って、いろいろな表現を体験して、発想が広がると思った」「絵を描くことが好きでない子どもも楽しく表現することができる」「自由に表現ができ、他の子どもとの差がなく、みんながそれぞれ楽しめる」「思いもよらぬ形や模様ができるので、子どもがいろいろな発見をすることができる」「身の回りのモノや色に目を向ける機会を作ることができる」「興味や関心が持てるので主体性が生まれる」「幼児でも容易に活動でき、色の名前も遊びの中で身に付く」など、その内容からは、子どもの表現意欲を高め、心身の発達を促すための有効な手段として、この活動を認識し捉えていることを窺い知ることができる。

項目7の学びに関しての学生の記述は、「正解がないので、自分の好きなものを表現す

る力が生まれる」「授業を心から楽しむことができた」「身の回りの植物などの自然な色を造形活動に生かす」「最初はうまくやらないといけないと思っていたが、うまくやることより自分らしく自由に表現することが大切ということを学んだ」「結果が見えないことも、想像力を働かせるので大切だと思った」「絵が苦手だからと言って、嫌だと思わずに、一つ一つの表現遊びを楽しむことで図工が好きになるということ学んだ」「自分たちだけでもすごく楽しかったので、子どもと一緒に遊んだり、遊びを考えたりするとき役立つと思った」などであった。これらのコメントは、表現遊びから何かしら発見した時の驚き、美しさや面白さに気付き、感嘆・感動することができる豊かな感受性を培うことの大切さや、表現することを楽しむことで得ることができる心のゆとりや充足感、意欲を持ってトライすることができる前向きな姿勢、などが素直に記述されていた。

美術教育の理念は、上手に絵を描いたり、物を作ったりすることをネライとはしていない。様々な素材や対象と関わりフィードバックしながら表現する中で、身の回りの世界の多様さや素晴らしさに気付き、それぞれの存在を尊重し、大切にすることで生まれる豊かな感受性と許容力を育むことを目的としている。さらに、素材や環境との関わりの中で、培われた豊かな想像力が物事の核心に迫ろうとする探求心につながり、それぞれの子どもに真の創造力が培われることをも目的としている。質問7のコメントからは、「上手に描くことが美術」という、狭い視野の固定概念の呪縛から少なからず解き放されつつあることを読み取ることができる。

最後の項目8のどのように保育に生かすかでは、「保育室に飾って彩りを付ける」「木の葉や木の実など季節を感じるものを造形の素材として取り入れる」「壁面構成の製作に子どもとともに活用する」「マーブル模様の紙に絵を描く」「ひな人形の着物をマーブリングや染めの紙で作る」「筆で塗るだけでなく手を筆の代わりにしてもよいと思った」「大きい箱にビー玉を子ども分用意して一緒に転がす」「夏野菜や秋の植物をテーマにしてスタンプングする」など、造形表現を特別なものとして捉えるのではなく、日常の保育の中で自然に活かすようにすることや、自然や身の回りの物を造形表現の素材として活用すること、体験した表現遊びを自分なりに発展させた遊びを考案するなど、保育者としての造形表現に関する力量の成長を感じさせる記述が多く見られた。学生が保育の場に就いたとき、これらのコメントのように、実際の保育でも活用すれば、子どもたちの心身の発達は健やかに促されるであろう。

おわりに

二十世紀絵画の巨匠パブロ・ピカソは、名言集に「ようやく子どものような絵が描けるようになった。ここまで来るのにずいぶん時間がかかったものだ」「誰でも子供のときは芸術家であるが、問題は大人になっても芸術家でいられるかどうかである」という言葉を残している。天才ピカソは、子どもの絵のすばらしさを理解できたのである。畏敬の念さえ感じていたと思われる。子どもの絵に宿る素直で純粋な心の表現に対する驚き、生き生きとして生命感がほとばしるような躍動感。そのような表現に魅了されたのである。子どもの絵は、子どもの心の内を表すリアリティーある代弁者となって、確固たる存在感を示していると考えられる。画家がいくら上手に写真のように絵を描いたとしても、そこにその心と、画家でしか見えない世界・考え方が宿っていないと、真の芸術とは言えない。多くの画家がその思想と生命感、心のリアリティーを絵の中に表現することを求めて、苦心惨憺しながら制作に打ち込んでいる。しかし、子どもは、そのことを呼吸するがごとく、いとも簡単に絵に表すことができるのである。幼児から小学校低学年の子どもは、この原初の才能が煌めく素晴らしい時期に在ると言ってもよい。

私が美術系科目を担当している保育系の学生は、卒業後、毎年9割以上が幼稚園や保育所などに就職し、保育者として子どもの保育・教育に携わっている。つまり、教えている学生の殆どが保育者として、お絵描きなどの表現活動をする子どもと関わるのである。そのため、「上手な絵が良い」という概念で表現活動の支援をすることは、天才であるこの時期の子どもたちの表現の煌めきを摘み取ってしまいかねない。さらに、一人一人の子ども心に寄り添うことができない保育者になってしまう危険性にもつながる。「え！」とびっくりするような表現、何が描かれているか分からないが、色や線が美しい表現、強く強靱な表現、柔らかくて穏やかな表現など、上手な絵に価値を置くことなく、一人一人の子どもたちの自由な表現を受け入れ、認めることができる保育者を育てることが、美術系科目担当教員としての責務であると考えている。そのためには、保育者になっていく学生にとって、「絵遊び」・モダンテクニクの表現遊びを十分に体験し、その中で既存概念を解き放ち、多彩な絵画表現の在り方を知り、その表現遊びの多様性と素晴らしさ、大切さを認めることができる知識と柔軟性、感受性を身に付けることが必要不可欠なのである。そのことが、将来、学生が関わる多くの子どもたちの心身の発達を順調に促すための、保育者としての知恵と力の源になると考えている。

参考文献

- ・ 幼稚園教育要領解説 文部科学省 平成 30 年 フレーベル館
- ・ 保育所保育指針解説 厚生労働省編 平成 30 年 フレーベル館
- ・ 幼児から児童につながる造形活動（遊び）に関する考察
東海学院大学短期大学部紀要 第 39 号 2013 若杉雅夫著
- ・ 子育て支援プログラム「遊びの森」実践報告 <1> 東海女子短期大学紀要 32 号平成 18
年 若杉雅夫他
- ・ 西洋美術の 281 人 美術手帳 美術出版社 1995 監修 = 諸川春樹
- ・ 現代アート辞典 美術手帳 美術出版社 2009 美術手帳編集部
- ・ パブロ・ピカソの名言・格言集。情熱と革新の言葉 | 癒しツアー iyashitoyr.com/
archives/226

A Study on Figurative Activities (Play) from Early Childhood to School Age II

Wakasugi, Masao*

本稿は、幼児から小学校低学年の児童を対象として、絵を描くことに自信のない子ども、嫌いな子どもに対する造形活動の支援の在り方と、子どもが主体的に表現活動に取り組むことができるように導く支援の在り方について、「絵遊び」とモダンテクニックの表現遊びの活動の実践を通して考察した。その具体的考察方法は、子どもの表現意欲と表現能力の育ちと心の育成に関しては、主に平成13年～平成24年の間、東海付属第一幼稚園の絵画製作非常勤講師として携わった支援の実際から導き出した。さらに、造形遊びを通じた親と子のかかわりに関しては、平成16年から10年間亘って実施した、子育て支援プログラム「遊びの森」（東海学院大学短期大学部主催）の親子支援活動の実践をもとに検証した。また、学生の絵画表現活動に対する意識の変化と支援能力の力量形成については、本稿で取り上げた「表現遊び」の各々の実践例と、名古屋柳城短期大学保育科一年生の「表現遊びの振り返り」を基に分析・検討した。また、本来あるべき子どもの絵に関しても私見を述べた。

キーワード：絵遊び, 子どもの絵, モダンテクニック, 上手・下手, 自由な表現

